



第13号

(発行所)

真宗大谷派

松岡山 廣讚寺

中村区城屋敷町3-30

TEL(052)411-5301

FAX(052)411-5341

## 介護抄

夫七十二歳の介護に励んでみえるSさん六十五歳から、その日その日の心情をつづった小文をいただいた。筆者なりの解釈をして、なるほどなーとうなずいている。

『がんばって。次の言葉も、がんばって』  
リハビリの夫を励ますのだが夫には妻の当たり前の言葉が鬼のようにとどく時がある。

『あれるのも病のせいよ、とひと呼吸』  
どなられても、わめかれても表情は変えることなく穏やかさを失うことのないようにと、努める。

『本心を外にだしたり、しまったり』  
夫婦とはどんなものか。これでいいのだろうか。私が病んだらどうなるのだろうか。年金・社会保障、暗い前途だなーと思ったりする。

『夫婦して喧嘩<sup>けんか</sup>しても二人かな』  
偕老<sup>かいろうどうけつ</sup>同穴。片言交じりでもよい。よちよち歩きでもよい。二人であることを喜ばねばならぬ。

『仏さん ちゃんと見ててと 手を合わす』  
今日も一日が終わる。



## 聖人のおことば

『このいまごぜんのは、のたのむかたもなく』

そらうをもちて候はばこそゆずりもし候はめ』

これは弘長二年十一月十二日聖人常陸の人々に書状を送り、今御前の母と即生房の扶持を依頼されたものである。聖人入滅は同年の十一月二十八日である。とすると死のわずか十六日前ということになる。聖人はその著作にあつて自己の身边を語ることは皆無といつてよい。世俗の推移も氣候の変化も一、二を除けばすべて皆無である。その聖人が最晩年にあたつて肉親の生活を依頼されるとは、師弟の深い絆きずながあつたからといえはそれまでかもしれないが、聖人にはこのことは禁句であつたように思える。

「いうべきでない」「いってはいけない」聖人の矜持きやうじが崩壊(展開)する一瞬に自然法爾をかいまみることができる。

### ご命日のつどいに参加して

(二月二十四日於美よし)

若き親鸞聖人の「苦難の道」につき説明を受けた。自力から他力への展開についてのお話はむつかしくあつたが感動した。凡夫として男女の生き方を身をもって教えて下さつた聖人のお徳に感謝するばかりである。人間として今この場にいることの喜びとはどんなものかを知ることができた。

大寒の夜はしびれるほどであつたが、友とのこの夜の語らひは暖かかつた。

(都二)

## お宮の犬

三月の上旬のこと、この日は文字通りの冬日で寒かった。

「お宮の犬が倒れている」ニュースがIさんに届く。自転車で駆け付けたIさんが見たのは次のようであった。

確かに父さん犬が倒れている。そばで母さん犬がしきりに父さん犬をなめている。

「あんた死んじやったのか」

とIさんは立った

まま、二匹の犬を

注意深くみるのだ

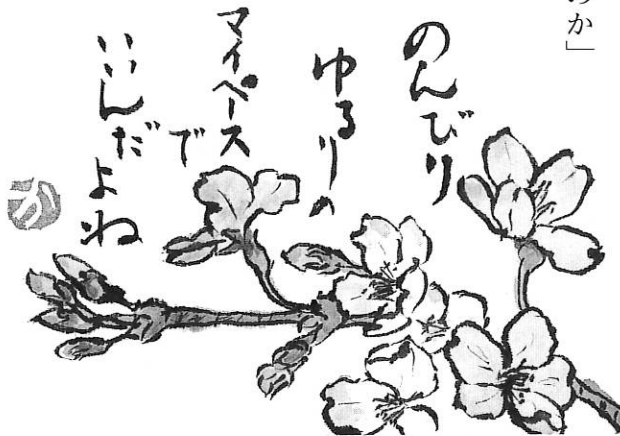
が、父さん犬はま

んざら死んだふう

でもない。かがん

でなでてみると、

「ピク」「ピク」



動く。「生きている」「生きている」。そうだ、末期の水でも飲ましてやろうと、急ぎ自宅へ。ジュースを一本携えて現場に戻る。

「のまあ」「のまあ」と口に流しこんでやると「ぐいぐい」と飲む気配である。

「なーんだ、おなががすいてたのか」

と安心して眺めていると、よちよちと立ち上がった。

「うちへいりゃあ。ごはんをやるでよー」

ゆっくりゆっくり二匹の犬がついてくる。おかいさんと

も、みそ汁とも、ミルクともいえぬ、ごちゃごちゃのも

のを与える。しつぽを振って喜ぶようになった。

その時、外で待っていた母さん犬が「くくくくうく

う」と鳴いた。父さん犬は退散。二匹はゆっくりとお宮

の方へ歩いていった。

Iさんは「つかまらんように行くだよ」と言いながら、

あの犬たちにも寿命の尽きる時がきたのだと寂しく思った。

# ※行事予定

四月七日(火)二時～四時 常任委員会

十一日(土)七時 同朋委員会例会

十八日(土)二時～四時 学習会

十九日(日)同朋会恒例旅行

・静岡別院

二十八日(火)十時 二十八日講・女人講

五月五日(祝)

復興永代経執行

午前十時より おつとめ おとき

説教 本澄寺 明仁師

午後は特別プログラムとして  
有志による詩吟・民謡・舞踊など  
廣讚寺座による演劇もあります



五月九日(土)七時 同朋委員会例会

十九日(火)二時～四時 学習会

二十八日(木)十時 二十八日講・女人講

